

小児科病棟での転落防止に関する付き添い家族の意識・予防行動への介入 ～パンフレット・ポスターによるオリエンテーションを導入して～

キーワード：小児・転落・オリエンテーション

1 病棟 5 階東

吉富早紀 三村かよ子 黒田朋美 磯部寛子 和田早枝華 山根有賀 末重千里

I. はじめに

入院中の小児は転倒・転落の割合が多いと言われており、小児におけるリスクマネジメントの重要課題となっている¹⁾。中村は「入院中の子どもの看護をする上で、安全を守ることは看護者として重要な役割であり、事故を予測し、未然に防止できるような能力が求められている」²⁾と述べている。

A 病院小児科病棟（以下小児病棟）は、構造上スタッフが児を常時観察することができない環境である。このため児の転倒転落防止を含めた安全確保の目的も含め、児の発達段階での母子関係の重要性、治療による児のストレスの軽減の目的などから、家族が付き添いをしているのが現状である。

小児病棟ではベッドからの転落インシデントが年間 15～20 件おきている。年齢層は 2 歳未満が最も多く約 75%を占めている。転落の多くは、ベッド柵を下げた状態で、家族が児より一瞬目を離したときに起こっている³⁾。そのため、付き添い家族（以下家族）へ入院オリエンテーションパンフレットを用いて転落の危険性を説明しているが、具体的な危険性や対応策についての記載はなく、看護師長・看護師が口頭で補足している。小児病棟では、病状が悪化してからの緊急入院の場合が多く、家族の転落への意識が高くないことも考えられる。そこで転落防止パンフレットとポスターを作製し、具体的な危険性と対応策についてオリエンテーションを行い注意喚起することで、家族の転落危機意識を高め予防行動へつなげたいと考えた。

II. 目的

転落防止に関する発達段階別パンフレットを用いてのオリエンテーションとポスターを掲示することで、家族の転落への危機意識を高め、予防行動への効果を明らかにする。

III. 方法

1. 研究期間

2012 年 11 月 1 日～11 月 25 日

2. 対象者

小児ベッドを使用する 10 歳以下の患児の家族（ただし寝返りができない患児は除く）

3. 方法

1) 転落予防に関する発達段階別パンフレット（図 1）と、ポスター（図 2）を作製する。パンフレットには実際に起きた転落事例をあげ、さらに注意点を具体的に分かりやすく記載する。また、発達段階ごとに起こしやすい転落事故とその予防策を記載する。

ポスターは人形を用いた転落しやすい場面の写真を掲載し、目の届きやすいベッドの

頭元の壁に貼付する。

2)入院 3 日目までに、家族へパンフレットを用い 10 分間のオリエンテーションを行う。

3)退院時に家族へアンケートを行い、転落への意識・予防行動について調査・単純分析を行う。

4. 倫理的配慮

アンケート用紙は無記名とし、参加拒否は自由であり、それによる不利益は受けないこと、プライバシーを厳守することを説明し、用紙の回収をもって同意を得たと判断した。

ご家族の方へ

「お子様の転倒・転落事故防止」のご協力をお願い

入院は、これまでと違う環境の中で生活を送ることになります。
お子さんの予想外の行動などで、お子さんがベッドから転落することがあります。

転倒・転落は骨折などのけがや脳出血など命に影響を及ぼす場合もあります。
当科では転倒・転落をおこさず安全な入院生活を送ることができるよう、生活環境を整備しながら転倒・転落予防に努めています。事故を未然に防ぐためにも、ご家族の方々のご協力をお願いいたします。



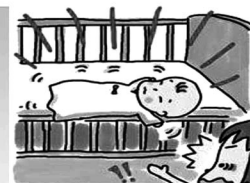
このような転落事故がおこっています。

- ① 柵を降ろしたまま、お母さんが一瞬お子さんに背を向けた時に転落した
- ② お母さんがベッドから降りようと柵を降ろした時に、お子さんが転落した
- ③ ベッド柵がしっかり固定されておらず、お子さんが柵にもたれたときに柵が下がり転落した
- ④ ベッド柵が中段までしか上がっておらず、お子さんが乗り越えて転落した（上段まであげていても、ベッド上のおもちゃや柵の外の点滴ポンプなどを踏み台にすることがあります）

お子さんの転倒・転落を防ぐための注意点

★ベッド柵は必ず上段まであげてください

- ① テーブルの物をとるためにお子さんに背をむけたときなど、少しでも目が離れるときは、ベッド柵をあげてください。
- ② ベッド柵を操作するときは、お子さんを柵から離し目を離さないように注意してください。
- ③ ベッド柵がきちんと固定されているか、必ず確認してください。
- ④ ベッドの上に踏み台になるようなものは置かないでください。また点滴ポンプは踏み越えないように、ベッドから少し離しておいてください。



お子さんはご家族の後を必ず追いかけてます！



お子さんが転んだり、落ちたときは観察が必要ですので、必ずすぐに看護師にお知らせください。

図 1. パンフレット（一部）



図 2. パンフレット

IV. 結果

アンケート回収数 20 名、回収率 61%、有効回答率 100%、付き添い者は全て母親であった。

児の年齢層は 0 歳～8 歳であり、最も多い年齢層は 0 歳と 1 歳児で共に 6 名ずつであった。オリエンテーション内容について「理解できた」は 90%、「やや理解できた」は 10%であった(図 3)。オリエンテーションの時期・時間に関しては 100%が適切と答えた(図 4・5)。説明に関して、「入院直後は頭もパンク寸前で返事だけをしている場合があると思う」や「ベッドの上げ下げの方法がわかりにくいため、一緒に練習をしたい」という意見があった。

ポスターに関する意見として、「写真つきでわかりやすかった」や「子供がポスターを気にしていた。子供向けのものがあるといいと思う」という意見があった。

また、母親がポスターを児に見せて落ちると怖いよと説明する姿や、児がポスターを見てベッドから落ちると怖いと言ってベッド柵が降りた側から離れる姿が見られるようになった。

パンフレットを使用したオリエンテーションでは転落の危機意識は 70%であったが(図 6)、ポスターでは危機意識が 100%へと上昇した(図 7)。

転落予防行動に関して「児から目を離すときにベッド柵を常に上げていた」は 90%であった(図 8)。日中はベッド柵をあげなかった 8 歳児の母の意見として「年齢的に大丈夫と思ったが、寝た時には必ず柵をあげた」という回答があった。

小児病棟への入院が 2 回目以降の母親 7 名のうち、パンフレット・ポスター導入前後で転落に関する意識に変化があったのは 6 名であり、「すぐにポスターに目がいった。意識が高くもてた」「改めて実感した」という意見があった。「意識に変化がなかった」理由は、「もともと気になっていた」であった。

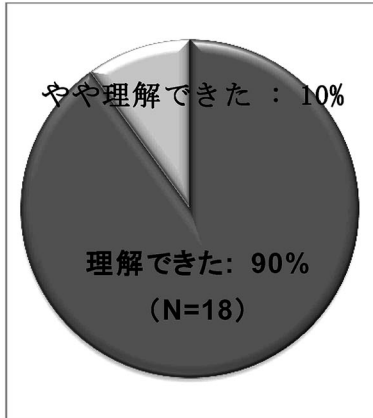


図 3. パンフレットの
内容理解度

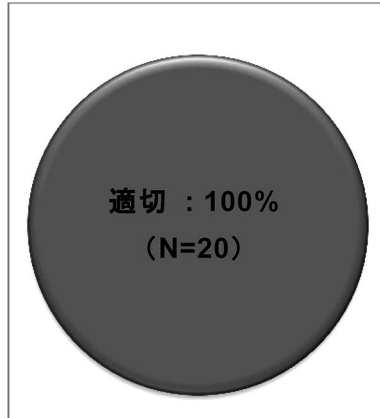


図 4. 説明時期が適切か

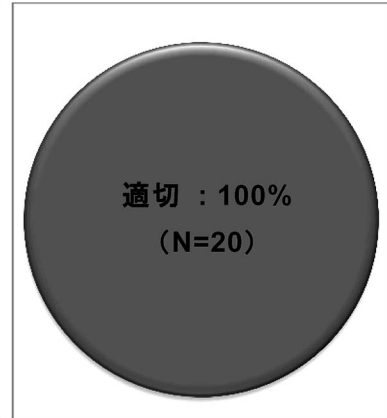


図 5. 説明時間が適切か

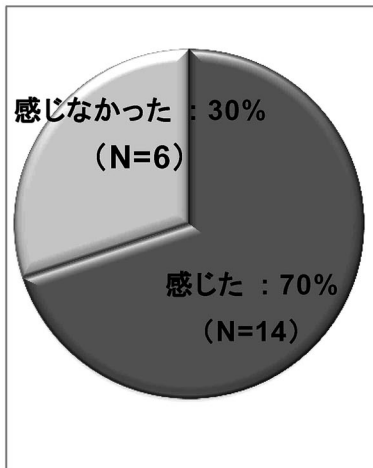


図 6. オリエンテーション後
に危機感を感じたか

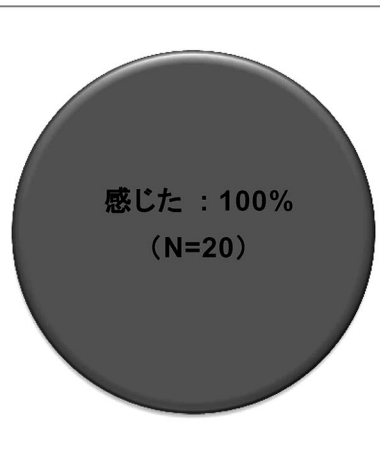


図 7. ポスターを見て転落に
注意しようと思ったか

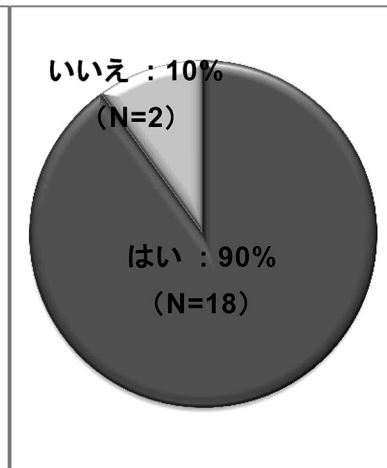


図 8. 児から目を離す時に
ベッド柵を常にあげたか

V. 考察

1) 説明方法

従来より長い 10 分間のオリエンテーションを入院 3 日目までに行うことで、転倒防止に対する理解を促すことができた。しかし緊急入院が多く家族の心の余裕はないと考えられるため、入院当初 1 回の説明だけでは十分とはいえない。日々の関わりの中で家族の状況や現在の児の活動性を踏まえながら継続して伝えていく必要がある。また説明を聞くだけでは理解できないこともあるため、ベッド柵の上げ下げを見守りで行ってもらうなど、一緒に実践することが必要である。

2) 説明内容

説明内容について「理解できた」と「やや理解できた」を合わせると 100%の家族が理解できた。従来の口頭での説明でなく、具体的な転落事例を記載したこと、発達段階に応じた転落の危険性と具体的な予防策を記載したこと、絵を入れて読みやすくしたことで危機意識が 70%となった。そして、ポスターを加えると危機意識が 100%へ上昇した。これはポスターを常に視界に入る場所に掲示したこと、写真を使用することで視覚に訴えることができイメージしやすくなったことが有効であったといえる。

3) 転落予防行動

90%の家族が児から目を離す時には柵を上げるようになったことは、危機意識を持つようになったと考えられることができる。

年齢的に大丈夫と日中柵をあげなかった 8 歳児の家族は、「学童児は入眠中の転落に注意するよう」説明を受け、「児が寝た時には必ず柵をあげた」と回答した。今回作製したパンフレットには転落に関する予防行動に関して、学童期では入眠中の転落の危険性を挙げていた。パンフレットでの指導内容が、この行動の変化に繋がったと考えられる。

転落に対するパンフレット・ポスターを使用したオリエンテーションは、新しい環境に順応させるための教育指導に有効であり、家族に心理効果・行動変化をもたらしたと考えられることができる。小児科病棟では過去 2 年間の転落件数のうち約 75%が 2 歳未満の児であったが、本研究の対象者の児も 2 歳未満が最も多く、今回この年齢の児の母親の意識を上げることができたことは、今後の転落予防策になったと考えることができる。

VI. 結論

1. パンフレットでの「発達段階における危険性へのイメージ」とポスターでの「視覚へ訴えること」の併用により、転落危機への意識が向上し、家族の予防行動へと繋がった。
2. 児を対象としたポスターなどの作製を行い、家族だけでなく児に対しても転落の危険性を説明していく必要がある。

引用文献

- 1) 丸谷彰代, 中川いずみ, 道端むつ子, 荒木裕子, 三谷恵里奈, 三村あかね: 小児科病棟における転倒・転落発生状況と関連要因の分析 金沢大学看護研究発表論文集録, 第 38 回, 69-72, 2006
- 2) 中村奈穂: 小児病棟での危険因子を考える 乳幼児の転倒・転落をどう予測し、どう予防するか 月間ナーシング, Vol. 21, No6, p36, 2001
- 3) 二尾かおり, 駒松仁子, 柏木公一: 小児看護学実習における“子供の安全をまもる”教育「転倒転落の事故防止」の教材開発と学習効果 国立看護大学校研究紀要, 第 4 巻, 第 1 号, 2005